

「筆談春画」に描かれたつんぼ

加 古 弘

はじめに

江戸時代において厳しく取締りを受けていた浮世絵のなかに、つんぼが描かれている春画があることをご存知でしょうか。画中の詞書には興味を引く記述も残されており、聾史研究の一助となればと投稿を試みた。

つんぼの描かれた春画とは

この春画（図画1）をご覧ください。知人に見せたところ「筆談春画」と命名されたつんぼの描かれた春画である。画中の詞書きから男はつんぼであることがわかる。遊里に遊びに来たつんぼを女郎（健聴者）が巧みにあしらっている様を描いたものだ。

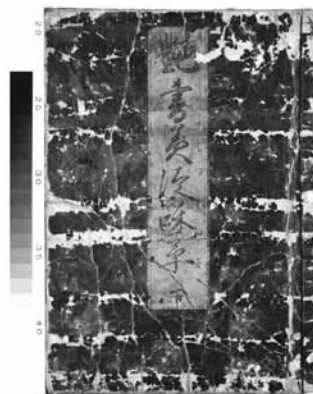
この春画は『艶書美徒和草（えんしょ

みつわぐさ』という春本（黒摺大本三冊）の中の下巻（図画2）の中に描かれた一枚である。所蔵している立命館大学アートリサーチセンターでは刊年や絵師などは未詳とされている。ただ、同所の研究員から得た情報では、「最近の説では絵師は竹原春朝齋（たけはらしゅんちょうさい）となっている」ということだ（『絵入春画艶本目録』より）。作品の中に竹原画とあることがその根拠とされているとの由。刊年については安永5年（1776）頃の説もあるようだがはっきりしていない。

参考までに竹原春朝齋（?～1800）について少し触れておこう。竹原は大阪の人物で本名を松本信繁といった。名所図会を多く残し、安永9年（1780）京都の吉野屋為八から出版された『京都名所図会』（1780）をはじめ、『撰津名所図会』



図画1 つんぼの描かれた春画

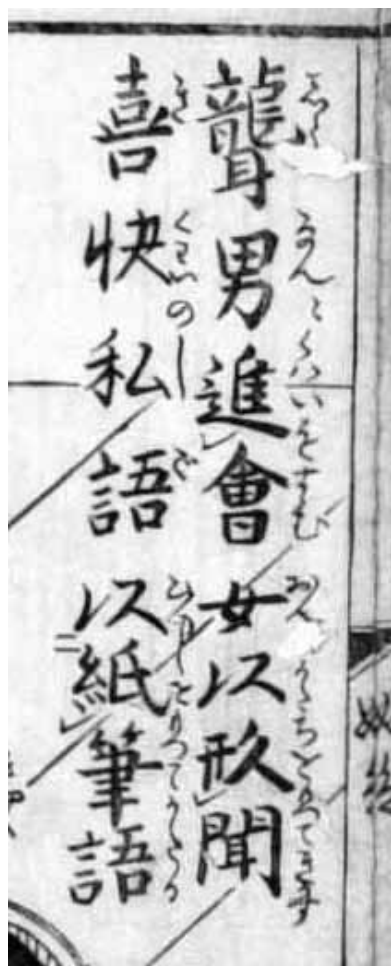


図画2 『艶書美徒和草』（黒摺大本三冊）下巻
（立命館大学アートリサーチセンター所蔵）

(1798) など、当時の名所案内図の挿絵を描き人気を博した絵師とされている。

「筆談春画」を読み解く

初期の春画を除き、多くの作品にはその描画を説明するための文書が添えられている。これらを、「詞書」や「書入れ」と言う。詞書の形態には文書のことであれば漢詩や和歌、狂歌、川柳といったものまでさまざまだがいずれも文語体が用いられている。また、書入れは画中の人物の肉声そのまま口語体で書かれたものをいう。これらの文を読み解くことで



図画3 図画1の右上に書かれた漢詩の詞書

絵柄だけでは見えてこないリアリティーが味わえると同時に、作者の意図をより深く捉えることができるのだ。

さて、「筆談春画」を見てみよう。画中の右上と中央に詞書があり、右上のものは漢詩で書かれている。人物の横には短い書入れが見られる。用いられているのは変体仮名あるいは旧字体であるが、これらを読み解くことで男がつんぼであり健聴者とのコミュニケーションを知るメッセージが残されていることが分かる。独学ではあるが、私なりに解説したものを文意と共に以下に紹介した。尚、右上に書かれた漢詩の詞書（図画3）には、本稿の主旨となる記述が含まれるため読み下しを付けた（旧字体は現行の新字体で表現し、漢詩に付された返読記号は省いた）。

詞書（漢詩）原文と読み下し。

【原文】 【読み下し】（□部分は消失）

聾男進會	し□なんくわいをすすむ
女以形聞	おんなかたちをもてききす
喜快私語	きくわいのしご
以紙筆語	ひっしをもってかたる

詞書（漢詩）の文意。

聾の男が女に会いに来た
女に身振りで問いかける
女は悦びのことばを
筆で紙に書いて伝えた

詞書（中央）の文意。

これは女郎のことを書いたものである
顔見知りにつんぼの客がいて
つんぼのくせにこの男 女遊びが大好きである

何時ともなく女郎の所に遊びに来る
 女郎も好い気はしないが
 その都度座敷に招き入れて
 待ち侘びていたかのように振舞ってみ
 せる
 つんぼが女を抱けば
 女も熱愛しているかのような振りをし
 房事を堪能したと
 本心でもないのに紙に書いて見せる
 なんとも商売上手である

「筆談春画」から見えてくるもの

1) 「聾」の読み仮名は？

詞書の冒頭「聾」の読み下しに「し□」
 と読み仮名がふられている。この時代の
 語彙を知るうえで参考になる部分だが、
 残念なことに二文字目が消失している。
 古語辞典や国語辞典などを参考に、聾に
 関わる単語を調べると、「し・い」、「し・
 う」、「し・ひ」、「し・ふ」と、いずれも
 「身体の器官（感覚）の機能を失うこと」
 を意味する語意を検索することができる。
 ただ、用いられている漢字はどれも
 「聾」ではなく、「癡」（スタレ・ルの旧
 字体）であった。そして、それぞれの送
 り仮名、「い・う・ひ・ふ」はその用法
 による活用変化を意味する。さらに、伊
 藤政雄著『歴史の中のろうあ者』（1998）
 には、「日葡辞書」について書かれてお
 り、そのなかにMimixij = ミミシイとい
 う単語が紹介されている。意味として
 Mimitcubure, miminotcubureta hito（ミ
 ミツブレ, ミミノツブレタヒト）と解説がな
 されており、同時に盲人のことをメシイ
 と紹介している。これらのことから、こ
 こにに書かれた「聾」の読み仮名は、そ

の音を表記したものではなく、広く身体
 の感覚機能を失った者を指す言葉として
 「し□」の仮名がふられたものと考察す
 る。

筆者はここまで「つんぼ」という言葉
 を用いて話を進めてきた。これはこの作
 品の時代背景および史料としての要素を
 鑑み、画中で使われている表現をそのま
 ま使うことにしたもので、「つんぼ」と
 いう件は詞書（中央）の中に三度にわた
 り表記されている。先の意識の中にもそ
 のまま使用した。同じように、「聾男」
 という表現も彼の代名詞としてそのまま
 使用する。

「筆談春画」から見えてくるもの

2) 筆談について

先にも触れたように聾男は女郎と短い
 会話を交わしている。その方法について
 漢文の詞書には、「女以形聞（おんなか
 たちをもてききす）」と書かれている。「女
 に形を以って聞いた」と解釈でき、今で
 いう身振りであることは容易に推測でき
 よう。聾男がどのような身振りをし、何
 を聞いたのかはどこにも書かれていな
 い。問いかけに対し女郎は紙に書いて答
 えている。詞書の「以紙筆語（ひっし
 （筆紙）をもってかたる）」がその部分だ。
 何を書いたのか具体的ではないが、「喜
 快私語」を伝えたとある。書かれた文面
 が伝わったのか否か？気になるところで
 はあるが、聾男の横に書入れが残されて
 いる。先にも述べたように肉声が口語体
 でかかれたものだ。これを読むと「えい、
 えい、えい、えい」と声を出しているこ
 とが分かる。彼が聾啞者なのか、あるい

は難聴者、中途失聴者なのか推察は会員諸氏にお任せしたい。

終わりに

「筆談春画」と銘打って進めてきた研究レポートではあるがこの春画の中に「筆談」という文字は見られなかった。筆者はそれを承知のうえで、描画を見て即座に「筆談春画」と命名した知人の妙にこだわりあえて研究ノートのタイトルに用いた。「筆談」、「筆紙」どちらもこの時代に使われていた言葉であり古語辞典などで検索できる。

最後に、筆者も『艶書美徒和草』の実物をまだ目にしていない。展覧会などの機会を得てぜひ聾男と対面してみたいと思うところである。

参考文献 順不同

- 伊藤政雄著 (1998) 『歴史の中のろうあ者』：近代出版
白倉敬彦著 (2003) 『江戸の春画』：洋泉社
福田和彦著 (2003) 『江戸春画の性愛学Ⅲ』：ベストセラーズ
林 美一著 (1988) 『浮世絵の極み 春画』：新潮社
林 美一著 (1999) 『時代風俗考証事典』：河出書房新社
大石 学著 (2009) 『江戸時代のすべてがわかる本』：ナツメ社
大石 学監修 (1998) 『古文書解説事典』「変体

がな・合字一覧』：東京堂出版

浅井潤子著 (1988) 『古文書判読字典』「かな字母一覧」：柏書房

浅井潤子著 (1987) 『古文書大字典』：柏書房

木村義之著 (2000) 『隠語大事典』：皓星社

芹生公男著 (2007) 『現代語から古語を引く辞典』：三省堂

大野 晋著 (1990) 『岩波古語辞典』：岩波書店

根岸茂夫他著 (1990) 『古文書字叢』：柏書房

小学館国語辞典編集部 (2001) 『日本国語大辞典・第二版 第五巻』：小学館

林陸朗監修 (1989) 『古文書・古記録難訓用例大辞典』：柏書房

馬淵和夫著 (1994) 『古語辞典』：講談社

中村幸彦他編集 (1989) 『角川古語大事典・第三巻』：角川書店

林 巨樹他編集 (1997) 『古語林』：大修館書店

鈴木一雄他著 『全訳読解古語辞典』：三省堂

若尾俊平著 (1991) 『古文書入門事典』「くずし字を読む」：柏書房

京都造形芸術大学著 (2002) 『古文書を読む』：飛鳥企画

柏書房編集部 (2001) 『古文書くずし字200選』

柏書房編集部 (2002) 『古文書くずし字500選』

日外アソシエーツ株編集 (2010) 『浮世絵レファレンス事典』：日外アソシエーツ

前田 勇編 (2003) 『江戸語大辞典・新装版』：講談社

江馬務他監修 (1967) 『近世風俗事典』：人物往来社

室町時代語辞典編集委員会編 (1985~2000) 『時代別国語大辞典 室町時代編1~4』：三省堂

村松明他編集 (1994) 『古語辞典・第八版・第十班』：旺文社

参考資料

異体字一覧表